

はがね かひな
鋼鉄の腕

漆

一 依頼

「お連れ様は、我々が確かにお預かり申した」

式杜人のひとりが進み出た。他の者と同じように土色の繋ぎ服に全身を覆われ、被り物を通してくぐもった声が無機質の壁に反響した。

「シチロージを人質に取ったと申すか」

こともなげに言われた言葉に、カンベエは明らかな不快感を表した。

式杜人に用はない。隣室に留め置かれたままの彼を連れてすぐさま立ち去ることも出来るのだ。左手で外套をわずかに払うことで、カンベエは抵抗する意志があることを匂わせた。

それに対して、相手は鷹揚に両掌を挙げてみせた。繋ぎ服

と同色の手袋が、まあまあとなだめるように上下する。

「そうではござらん。詳しくは、我らが代表がご説明申しますゆえ」

言い終わるとくりりと背を向け、通路への扉に手をかける。

カンベエはそれに厳しい視線を向け、それから居並ぶ他の式杜人を見やった。どの顔も被り物に隠され表情を窺うことは出来ない。彼らの肩越しに隣室への扉が見えたが、向こう側の様子を知る手がかりはなかった。彼らの指示を拒絶する余地はないと見てカンベエはひとまず従うことにし、案内役について通路へ出た。

虹雅溪の地下深く、式杜人が根拠地とする天守閣戦艦は、船体がどの程度残っているのかは不明だったが、カンベエに見える範囲では十分に往時の姿を留めていた。豪華な装飾や厚い敷物に埋め尽くされていた天主の都とは大きな違いだ。

カンベエの靴底同様、式杜人の繋ぎ服の脚部裏にも金属部分はないようだった。かつては軍靴が通路を行き交う音が反響していた高い天井に、今はひたひたとひそやかな足音だけが囁きかけた。

程なく、同じような扉が並ぶ一面に到着した。案内役は迷わずそのひとつの前に立った。

「シマダカンベエ殿をお連れしました」

中から返事はなかったが、案内役はかまわず扉を開けた。

促されて入った部屋は畳八畳ほどの広さしかなかった。戦艦でこの程度の広さの区画と言えば中級将校の居住区だ。しかし室内には、寝台などの生活用品の代わりに、会議用と覺しき楕円形の卓と五脚の椅子のみが置かれていた。

一番奥に、初老と見える男がひとり座っている。彼は式杜人の常とは違い、顔を覆っておらず繋ぎを着てもいなかった。

「こちらが、我が代表でございます」

紹介されたその男が立ち上がって手を伸ばした。素手だった。彼の動きにつれて、まとったゆったりとした長衣が揺れる。

その様子からは、尊大さも威圧する意図も感じられなかった。

「シマダ殿、お会いできて光榮至極」

発せられた声も、動き同様にゆったりとしていた。

「お好きなおかけ下され」

「式杜人の代表とあれば、まずは名を名乗られよ」

「これは失礼いたしました。しかし、我らにはそのような意味での名は最早ありませんでな」

「お主らの在りようを見れば分からはないが、それは式杜人内部でのみ通用すること。しかも、そうして顔を見せておられるのだ。それ相当の考えあつてのことと見るが」

「言われるとおり、これでも精一杯の誠意をお見せしておるつもりだ。そのうえ名乗れと言われるならば……某（それがし）はタジマということではいかがかな」

「選ぶのはそちらだ。異存はない。では、用件を伺おう。但し手短に願いたい。ここへ参ったは、人質を取られて強制されたゆえだ」

「人質ではないとご説明申したはず。お連れ様は丁重におもてなし申し上げる。ご不満、ご不快はごもつともなれど、まずはおかけ下され。少々込み入った話になりますのでな」

自分が腰を下ろさなければ始まらないと理解して、カンベエは出入り口に最も近いところに席を取った。タジマも再び腰を下ろすと、今度はいくらか強い調子で語り始めた。

「最後の天主、ウキョウを覚えておいでかな？」

「無論だ」

つい二、三ヶ月前の戦さの光景が目の前に広がった。

カンナ村を殲滅せんと襲いかかる都に乗り込み、その主であるウキョウを、カンベエは己が手にかけたのだ。そこに至る一連の出来事がカンベエの脳裏に鮮明によりみかえった。

それを待っていたかのようにひと呼吸おいてから、タジマは話を続けた。

「そのウキョウの背後で糸を引き、先代の天主を殺（あや）めさせた者がおるのだ。シマダ殿に、その者を倒していただきたい」

「それは、……有り得ぬ事ではないが、確かなのか？」

思いがけない内容に、カンベエは即答を避けた。

「お主は、お主ら式杜人は、天主の仇を討ちたいと望んでいるのか？」

「そうではない」

打ち明け話をするかのように、タジマはわずかに身を乗り出した。

「先の大戦が終結する前から、商人（あきんど）も武家同様

にさまざまな同盟を結成し、あるいは協定を結んで、互いに市場での覇を競い合っていました」

そこで言葉を切つて、一瞬遠い目をする。

「自分たちだけでは不足と見たのか、中には中小の国家や軍部に誘いをかけた者もありました」

「商人は商売の相手とは一線を画していると思つていたが」

「それぞれの側に、目端の利く、いや欲の深い輩（やから）がいたと言うこと」

「そうした話を、聞いたことが無くはない」

「ほお、いささかでもご存じならば話が早い」

カンベエの反応に、タジマは満足げにうなずいた。

この式杜人の代表という人物はどのような背景を持つているのだろうかとかカンベエはいぶかった。巷の噂では、式杜人は機械の体を手放したサムライの集団だと言われている。先ほどの案内人は、まさしくそうだと言わんばかりの言葉遣い、身のこなしだったが、タジマの立ち居振る舞いにはそうしたものはそれほど感じられない。言葉遣いも微妙に揺らいでいる。何より生身の体を持っているのだ。式杜人の代表として

あらゆる方面と交渉を持つならば、時にはサムライになり、時には商人にもなるということか。

「それで？」

カンベエは先を促した。語るタジマの声が熱を帯びてきた。

商人達の合従連衡は次第に淘汰されて、五大講と呼ばれる五つの大きな勢力圏にまとまっていった。その一つに宇内(うだい)講と呼ばれる講があった。

潤沢な資金力を背景に勢力拡大を図っていた宇内講が、あるとき突然瓦解した。先の大戦終結の直前のことだった。原因は、比較的若い幹部らを中心とした集団が袂を分かちて自立したからだと言われている。そして、宇内講の崩壊が世界の経済的構造を破壊し、その結果、終戦が早まったのだとも。

新しい勢力の中心人物のひとりは、当初は稚彦(わかひこ)と名乗っていた。急速に勢力を伸ばすため、彼らは裏切りや挑発など恥とも思わず勝手放題をし、ついには先輩格である他の講や同盟を襲撃するに至った。その手先に使われたのが、機械のサムライを中心とする傀儡政権だった。

大戦が終結すると同時に世界中に影響を及ぼし始めたのは、そうした若い商人達の集団であった。稚彦のその後の姿と見られる人物はいつしか天主と称して支配を強め、彼らは協力関係にあったサムライすらも裏切った。

ゆえに、サムライと天主と老商人、この三者が互いに敵対関係にあるという構図が出来上がったのだ。式杜人もその例に漏れない。

「では、式杜人についての噂はまことであったのか？」

「……もとは機械のサムライであったということかな？」

目配せだけで肯定するカンベエに、タジマはかすかな笑みを浮かべた。

「世間の目はごまかせぬというわけですな。打ち明ければ、ここにはそういう者もおれば、そうでない者もおる。彼らのあの姿は、もはや生身の体を持たぬ者への便宜であると同時に、己が身を隠したい者の隠れ蓑でもある」

「互いの区別もなくなる」

「左様。かつての身分の上下も職業の別も、ここでは意味を

成さない。ただめいめいの仕事に当たるとのみ。さて、話がいささかずれましたな。戻すといたしましょう」

カンベエも同意した。式杜人について明らかにされたことに關しては、いづれ詳細を知る機会もあるだろう。

「我らが、ウキヨウの背後にいる者を打ち倒したいと望むのは、それが宇内講他の生き残りだと考えるゆえ」

「老人はウキヨウを使つて若い裏切り者を倒し、お主らはこのシマダカンベエを使つてその老人を倒す、というわけか」

「ごく簡単に言えばそういうことになりますな」

「いつぞや、勅使暗殺の下手人になりすまして都に乗り込むのに手を貸したのは、既にそういう意図があつたからか？」

「あの時は、都に何らかの混乱をもたらすことが出来ればというほどの思ひでしたが、予想以上の展開でした」

当時の式杜人の協力ぶりをカンベエは、強大な権力を有する天主や大商人と対等に渡り合っている彼らがさらに影響力を増したがっているのだらうと考へていた。

「事情は分かつたが、こちらにはその黒幕とやらについての情報も発見する手だてもない」

「居場所なら、すでに概要をつかんでおります」

「…見つけておるなら、さつさと自分たちの手で決着をつけられたら良からう」

「それではちと目立ちすぎますのでな。お聞きおよびでしょうが、式杜人は結界を守りつつ隠れて暮らす陰の存在」

タジマは、取り澄ました表情の中にきらりと人を脅すような光を宿して答えた。

その結界の奥に鎮座ましましてるのが蓄電筒の製造工場であることをカンベエは知っている。結界は、人々を恐れさせ遠ざけるための道具に過ぎない。

「シマダ殿がその者を討ち果たせば、おそらく世間は、天主や都との戦いの延長と思うことでしょうか」

「今頃あの戦さを再開する必然性がこちらにあるとは思へぬ。お主らの手でそういうことに仕立てられるだけであろう。そもそもこの度のこと、これは式杜人の総意なのか、それともお主の、あるいは一部の者の画策することか？」

「そこまでお話しすべき義務はありませんまい。シマダ殿が関わつてこられた戦さに繋がる仕事を、式杜人代表たる私がシ

マダ殿にお願いをしている、それで十分だと考えますが」
タジマはそれだけ言うと言子に寄りかかった。事の詳細を知った以上、カンベエはもはや後へは引けまいと読んでいるようだった。

どうしたものか。カンベエはしばし考えを巡らせた。その黒幕とやらを斬る必然性が、今の自分には全くない。

確かにあれは、芋づる式に繋がりが広がっていく戦さではあった。しかし、野伏せりをカンナ村から追ひ払う仕事を引き受けたのは、米を育て守るという村人の生業と心意気の中に、根本的なところで戦さ場に通じるものを感じ取ったからだ。それゆえ、彼ら自身にも戦さに加わることを求め、彼らはそれに応えて慣れぬ弓を引き命を張った。あの戦さの本質は、この一点に尽きる。だが、式杜人は、何を差し出すのだ？

「今回は、関わりを持つべき戦さではないようだ」
カンベエは立ち上がった。

「シチロージを伴って、直ちにここを出て行くことにする」
「お連れ様はすでに別所に移られました。シマダ殿がお戻りになったらご案内いたしますよう」

見上げるタジマは穏やかな表情を崩さなかったが、その瞳の断固たる色合いに揺らぎはなかった。

丸腰の相手をカンベエは見下ろす。刀を振るえばここを出ることは可能だ。がしかし……

農民には、田畑（でんぱた）を真に自分のものとして取り戻すために自ら戦えと言った。今度は己れの番らしい。戦さの相手は、くだんの黒幕とやらか、それとも、この式杜人か。

「……まさに戦さだな」

それに対して一度頷いてから、タジマはその場にいない誰かに向かつて声を上げた。

「キチロウをこれへ」